

三代道沢右俣

一九七七年六月二十六日

◆天気（雨のち曇）

三日間も小雨が降り続き、なかばあきらめていたのが、天候回復のきざしが見えたので小雨の中福島を車で出発。米沢を過ぎた所で雨があがる。スカイバレーの入口、沢近くに車をおいて入谷。たいして大きな滝もなく単純だが、やがて廊下状となり沢登りらしい気分になる。F3を越えるとナメが続いている。F5を越え二俣、右俣をつめる。

左俣には大きな滝（約三〇m）があり、次回の楽しみとする。水量比で二・三と右俣の方が多い。右俣に入ると水が冷たく感ずる。やがてF6階段状の見事な滝である。四m程のナメ滝を越えると砂防ダムに出る。登山道さえない山中でも積んだ石をコンクリートで固めてある。しかし砂防ダムも埋れて、ダムとしての機能はほとんど果せなくなっている。F8は高さが約四〇mで、ハングギみに落ちている。左岸を捲くが浮き石が多く、草

も確実なホールドとはならず、ヒザや手のフリクションだけで登る。捲き終えて滝の上に出る。F9に続くナメは非常に滑りやすい。ここからは平凡な沢となる。F10は左右どちらでも登れそうだが、左岸を捲いて登る。この上で沢は二つにわかれるが水量はまだ割合多い。砂防ダムを二つ越えるとまた二俣。いよいよ水量が少なくなつたので途中よりヤブをこいで登山道に出る。時間が早かつたので地竹やワラビをとりながら下る。

〔タイム〕

出合八・二五―二俣九・〇〇―沢終了一二・一五―登山道一二・三〇―若女平一三・一五

（記）

三代道沢左俣右沢

一九七八年六月二十五日

◆天気（晴）

七時一五分湯ノ入沢出合に車を置いて沢に入る。一條は沢が初めてで、わらじが信用できないのか、かなりペースは遅い。二俣まで一時間五分。左俣最初の滝は左岸

が登れる。右岸高捲きすれば今は全く使われていない踏跡に出る。ここを過ぎると沢幅も広がり単純な河原となる。途中高さ五呎長さ一〇呎位のナメ滝があるが、それを越えると幅こそ狭くなるがまた変化のない沢が続く。昨年ものわらじのためかポロポロになったが、たいして大きな滝もないのでそのままミズナ・フキを採りながら登る。左から小沢が入っていたので、「つまらない沢だから左に逃げて尾根に」と思いそつちに入り小滝を越えたら水が涸れブッシュとなる。「これは大変」とまた元に戻る。今度はスケールこそ小さいが小滝が続き快適な沢登りとなる。二呎、一五呎の二段の滝がかかっている。右沢の方が水量が多いが左沢の滝も見事である。上の方まで見えないが少なくとも二〇呎もある。右沢は一〇呎、その上に七〇呎の滝が雄大に落ち、その中間に六〇呎の滝が合流。この沢の核心部といえる。最初の一〇呎の左岸を捲き六〇呎の滝の下流を渡って七〇呎滝左岸の小尾根に入る。立木が多くホールドが充分。この上流は水量も少なく、大きな滝はないがかなりの勾配である。右岸のきれいなスラブ滝を過ぎると涸れ沢となる。しかしその上流の六呎滝にはやや流れがある。おそらく二枚沢（伏

流）となつてゐるのだろう。この辺からアプがうるさい。やがてまた沢は二つにわかれる。右の方へ入るがすぐヤブとなり一時間二〇分で天元台スキ場第三リフト終点に出る。（記・）

〔タイム〕

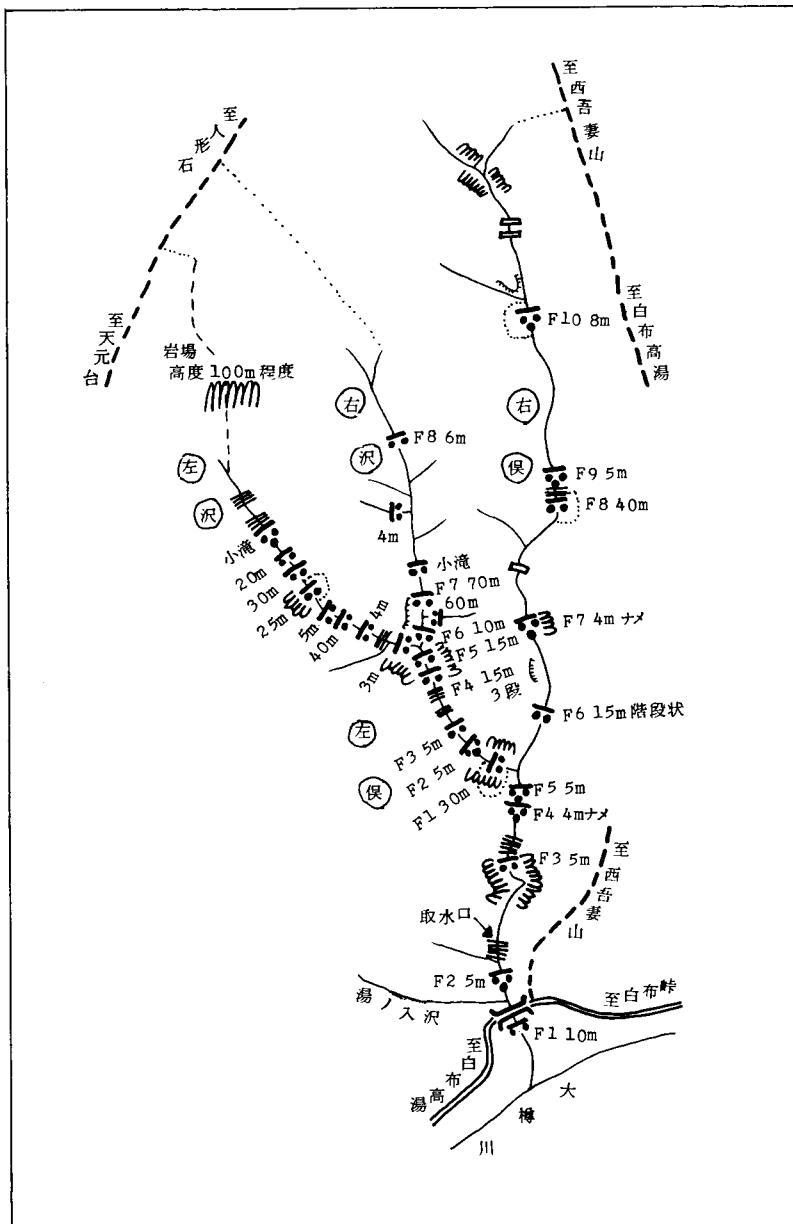
出合七・一五―二俣八・二〇―奥の二俣二・二一―
最終滝一三・一五―第三リフト終点一四・三五

三代道沢左俣左沢

一九七九年七月十日

◆天気（快晴）

西吾妻スカイバレーに入る手前、三代道沢と湯ノ入沢の合流する所に橋がある。そこに車を置いて遡行を開始する。いくつか小滝をすぎ三〇分程進むと沢が「S字状」になる。その先に八呎、五呎と滝が現われ、のちに二俣となる。私達は小休止後左俣に入る。すぐ四〇呎程の滝がいくらかナメ状になつて目の前に現われる。岩がすべてで右岸のブッシュを利用して捲く。その後一五分ほど沢は再びわかれ、私達は左沢に入る。水量は二・一



三代道沢 (作図：村 寿)